

# 川崎美術館研究（二）——川崎正蔵の作品収集と美術館活動——

石 沢 俊

実業家・川崎正蔵が明治二十三年（一八九〇）九月六日に神戸市布引の川崎邸に開館した日本初の私立美術館「川崎美術館」に関する研究の続編。本稿では、神戸における実業家としての川崎正蔵の功績、川崎美術館の開館経緯と展示室、展観について、同時代の新聞記事や川崎美術館の陳列品目録などをもとにしてたどり、川崎正蔵の作品収集と川崎美術館の活動を明らかにする。

## はじめに

明治二十三年（一八九〇）九月六日、神戸市布引の川崎邸に「川崎美術館」（図1）が開館した。実業家・川崎正蔵（一八三七～一九一二）が収集した日本・東洋の美術品を公開する日本初の私立美術館である。

日本における美術館の歴史は明治十年の第一回内国勸業博覧会を端緒とし、期間限定の博覧会場で「美術館」が開設され、内国博覧終了後も活用された節がある。<sup>(一)</sup> また、明治二十一年に府立大阪博物場に開館した「美術館」が常設された美術館の始まりとも考えられる。<sup>(二)</sup> 日本初の私立美術館については、大正六年（一九一七）に大倉喜八郎（一八三七～一九二八）が東京に設立した大倉集古館と考えられ

てきた。近年の研究では、大倉集古館の前身である大倉美術館が明治三十五年、赤坂の大倉邸に建設されて訪問客の観覧に供したことや、大正二年十月十五日に浅野家によって広島市に開館した観古館の存在が明らかにされてきている。<sup>(三)</sup>

川崎美術館は日本における私立美術館の先駆となるが、その重要性にもかかわらず先行研究は限られており、川崎美術館の存在は一般にはほとんど知られていない。<sup>(四)</sup> 執筆者は本紀要第三五号にて明治から昭和初期の新聞・雑誌記事を通して、川崎美術館の活動とコレクションの行く末をたどった。<sup>(五)</sup> その後判明した新聞記事については補遺として別稿をまとめるとともに、川崎正蔵と川崎美術館についても別稿や発表を通して明らかにすることを目指してきた。<sup>(六)</sup>

本稿ではその続編として、川崎正蔵による作品収集と川崎美術館の活動をまとめる。はじめに実業家としての川崎正蔵と神戸との関わりを概観する。その上で、川崎美術館の開館について、美術館の立地と建築、開館式での館主挨拶、川崎正蔵の作品収集、九鬼隆一による美術取調の四点を整理する。さらに、川崎美術館の展観について、開館方法、観覧方法、展示室と陳列品目録の三点を明らかにする。これらを通して、日本に伝来する美術品を守り、同時代と後世に伝えることに熱意を注いだ川崎正蔵と、彼が創った日本初の私立美術館「川崎美術館」の意義を明らかにすることを目指す。

## 一、実業家としての川崎正蔵と神戸

川崎正蔵と神戸の関わりは明治十年（一八七七）五月八日、葺合村の畑地四反を購入したことに始まる<sup>(七)</sup>。当時、川崎は東京を拠点としており、翌十一年には築地の官有地を借用し、川崎造船所を設立している。同十三年秋には神戸市東出町の海軍省官有地（官営兵庫造船局と湊川を隔てた反対側の海岸に立地）を借用、翌年三月に兵庫川崎造船所を開設すると、東京、神戸の二ヶ所で造船所を経営した。同年十二月十二日には布引山の山林、山本通と布引遊園地の宅地を買い入れ、同十八年頃には布引に本邸の新築を開始した。同十九年五月、官営兵庫造船所の貸下げが決定し、兵庫川崎造船所と

改称すると、九月には東京の家を引き払い、大阪・江戸堀、神戸・川崎町と転居したのち、布引の本邸に入った。同時期には、築地造船所の設備を全て神戸に移しており、実業、生活の拠点とも神戸に定めている。同二十年には官営兵庫造船所が払下げられ、川崎の有となった。その後、神戸での造船所経営に注力した川崎は、明治二十九年十月十五日に株式会社川崎造船所を設立すると、松方幸次郎社長、川崎芳太郎副社長らに同社を託して、自身は顧問に就いた。明治三十一年には神戸新聞社を設立し、川崎正蔵は初代社主として「神戸新聞」の創刊に携わった。明治三十八年十一月二十一日には合資会社神戸川崎銀行を創立して監督に就任、明治四十三年には株式会社布引鉾泉所も設立するなど、神戸を拠点に実業家として活躍した。

## 二、日本初の私立美術館「川崎美術館」の開館へ

### （一）立地と建築

明治初期から作品収集を重ねた川崎は、明治二十二年（一八八九）夏から布引の自邸内に美術館の新築に取りかかった。改めてその立地を確認していくと、「川崎本邸敷地並二建物配置図」（大正十五年（一九二六）五月十日）によれば、神戸市加納町一丁目の南北に広がる敷地に川崎邸があり、敷地の北端に川崎美術館と長春閣が立地

したことがわかる。<sup>(6)</sup>「実地踏査 神戸市新図」(図2、大正七年一月二日、神戸市立博物館蔵)を見ると、川崎邸が布引山麓に立地したことがより具体的に把握できる。「訂正増補神戸市図 附名勝旧跡」(図3、明治三十三年、神戸市立博物館蔵(池長孟コレクション))には布引山麓に「川崎美術館」の文字と二階建及び一階建の和風建築が描かれており、当時の神戸における認知度の高さを伝えてくれる。明治、大正期の地図と現在の地図を照らし合わせれば、川崎邸はJR新神戸駅周辺の広大な敷地を有していたことがわかる。そして、川崎美術館や長春閣はJR新神戸駅の北西辺りに立地したと推定される。

川崎美術館の開館の様子を伝える新聞記事には「美術館は川崎氏邸宅の傍、一段高き処に山に凭りて建築したるものにて文明天文時代のものに擬せしなりとぞ。」と記されている。<sup>(7)</sup>先に確認した立地が概ね合致するわけであるが、ここにはもう一つ重要な情報が含まれている。それは、文明天文時代すなわち室町時代、十五世紀半ばから十六世紀半ばの建造物に擬えて建築されたことである。川崎美術館は工匠・柏木貨一郎(一八四一〜九八)の設計であり、<sup>(8)</sup>瓦葺二階建の外観は規模が異なるものの、たとえば長享三年(二四八九)上棟の東山殿(慈照寺観音殿(銀閣))と近い。川崎美術館の陳列品目録からは障壁画や床之間、違棚、入側を備えたことが確認で

き、内部は書院造に基づくとわかる。文明年間といえ、まさに八代将軍・足利義政が東山殿の造営を開始した時期にあたり、下限とされる天文年間足利義輝が十三代将軍であった時代となる。

一方、長春閣は明治三十二年十一月九日に川崎美術館の北東に竣工した瓦葺一階建の建造物であった(図4<sup>(9)</sup>)。同日の皇太子行啓にて川崎邸を訪れ、長春閣で休憩後に川崎美術館を御覧になった。長春閣はこの時が座敷開きであり、第九回展覧(明治三十四年以降)からは川崎美術館と長春閣の二館が公開され、展覧が行われた。晩年の川崎正蔵は長春閣に住み、余生を送っている。長春閣の設計者は不明ながらも、外観の近しさから同じく柏木貨一郎の可能性がある。

「神戸 布引 久形橋」(図5、個人蔵)は生田川の東岸から対面に聳える川崎邸を撮影した絵葉書である。生田川に架かる久形橋の西側には一段と高い丘があり、背の高い木々で全貌はうかがいしれないが、豪壮な和風、洋風の建造物が立ち並ぶ。瓦葺二階建の川崎美術館、右手前には瓦葺一階建の長春閣があることから、明治三十二年十一月以降の撮影と推定される。生田川西岸の「ヌノビキタンサン」の工場や布引温泉と建物と比較すると、川崎邸が「ソロモンの豪華を誇った」と謳われたことも首肯できる。<sup>(10)</sup>

(二) 開館式における館主挨拶

明治二十三年九月六日の開館式にて、川崎正蔵は館主挨拶を述べた。  
川崎が作品収集と美術館建設の意義を語った重要な資料である。<sup>(一三)</sup>

美術館新築落成し、將に本日をして以て開館の式を挙げんとす。時に貴賓諸君の光臨を忝うす。正蔵の栄、之れに過ぎず深く謝し奉る処なり。抑我國の美術品は諸外国に勝り、珍奇優美の品少しとせず。然るに、滄桑一変之れが保存の途幾しと絶え、或は不用品となし、又無用の長物と見做し濫りに売捌き其海外に涉りたるもの少からず。豈歎すべきの至りならずや。正蔵、前に之を思ひ、数十年以来美術にして優美なりと信ずれば、其価の高下に拘はらず力の及ぶ限りは之れを購求し、今集て千数百の数に昇れり。而して、惟ふに之れを秘藏し格納し置けば、独り其道に益なき耳ならず、国の宝も埋没するに似たり。於是、去年の夏始めて此美術館の新築に掛り、今や漸く成るを告ぐ。爾来、時々開館して広く美術家の参考に供し、以て其道進歩の一助となすも、豈国家に裨益なしとせんや。幸に微意の有る処を諒せられ、而して品評の如何は謹て諸君の高覧に譲る。

頓首再拝

※以下、引用では旧字体は適宜改めた。

句読点、傍線は引用者による。

すなわち、明治維新をきっかけにした急速な欧米文化の流入とその反動による日本の伝統的な文化の軽視、さらには廃仏毀釈を背景として、日本の美術品（ここには古渡の中国、朝鮮の美術品なども含むと考えられる）が軽んじられ、海外へ流出さえする状況を川崎は憂慮していた。そこで、「優美」と評価した作品は価格に拘らずに収集すること数十年、川崎コレクションは千数百点を数えるに至った。しかしながら、これらの作品を秘藏し、蔵に格納しておいては美術界にとって無益であるのみならず、国の宝も埋没するようなものと判断した川崎は、前年夏から川崎美術館の新築を始め、明治二十三年九月によりやく竣工した。これより時々川崎美術館を開館し、作品を公開することで広く美術家の参考に協力し、美術の進歩にわずかばかりでも貢献することで国家の益となると考えていた。そして、自分のわずかな志を承知いただければ有難いが、その収集と美術館での公開については、ご覧いただいた来館者それぞれの評価に委ねると述べた。

日本の美術品の海外流出について、川崎は複雑な心境を抱いていたのではないだろうか。川崎は十五歳から鹿児島や長崎の浜崎家の店員として、海運、貿易、造船の諸事業に携わり、その後は大阪の官糖取扱所にて琉球の官糖販売の独占的特権を得ていたため、需要<sup>(一四)</sup>

に応じた物の売買、流通は身を持って知っていた。日本の美術品が日本国内で正当に評価されず、海を渡ることにより、彼自身が実業家として造船業で成功し、間接的にではあるが、海外流出に関与してしまっていること、作品をも運ぶ船で自らが財をなしていることに自責の念を抱いたことが想像される。船が行き交う神戸港を布引の自邸から眺めた川崎の心境はいかばかりであつたろうか。

### (三) 川崎正蔵の作品収集

川崎は開館式で自身の収集活動を数十年と述べたが、同館の開館を伝える新聞記事では十数年来とするものもある<sup>(一五)</sup>。川崎正蔵七回忌に刊行された『川崎正蔵』では美術品収集を前後四十年と記しており、これに従えば明治初期には収集を始めていたことになる<sup>(一六)</sup>。

川崎の作品収集の実例をみてみよう。伝顔輝筆「寒山拾得図」(図6、重要文化財、東京国立博物館蔵。以下、指定と所蔵は現在のもの<sup>(一七)</sup>を記す)は川崎コレクションの代表的作品である。『川崎正蔵』によれば、本作品は足利義政が所蔵した東山御物で、その後織田信長の所蔵となり、石山合戦の和議にて石山本願寺・顕如上人へ贈られた。維新前後に本願寺から大阪天満の大根屋某なる豪商、ついで伊丹の某の手に渡り、山中簪篁堂の山中吉郎兵衛がこれを入手した。

山中吉郎兵衛は松方正義、井上馨、藤田傳三郎、益田孝へ作品写真を送ったが、いずれも絶品と認めながらも価格が折り合わなかった。本作品をどうしても入手したかった川崎は、今後三年は本作品の行方を他言しないことを条件に購入したと伝える。「寒山拾得図」を川崎が入手した時期については、東京に居住しながら兵庫造船所の払下げを受けて間もない明治十八年としている。しかしながら、払下げは正しくは同二十年であり、払下げ時点ですでに「寒山拾得図」を所蔵していたことになる<sup>(一七)</sup>。

一方、高橋簪庵の『簪のあと』にも本作品入手の経緯が記されている。山中吉郎兵衛が「寒山拾得図」を入手したのは明治十七年とし、藤田傳三郎が関心を示さなかったため、貿易商会の若井兼三郎が斡旋を引き受け、松方正義らに勧めたが折り合わなかった。その後、作品写真を一見した川崎正蔵が狩野探美に鑑定を求めると、「古今未曾有の逸物なり」と評価を得たため、川崎は一五〇〇円で購入したと伝える。しかしながら、川崎の入手時期は明治十七年か十八年かは判然としない<sup>(一八)</sup>。さらに、斎藤利助は『書画骨董回顧五十年』のなかで、川崎が本作品を入手した時期は言及しないが、その額を八〇〇円と記している<sup>(一九)</sup>。

このように、「寒山拾得図」の入手時期、金額等が確定できないなど、川崎の作品収集はなお不明な点が多い。ただ、山中吉郎兵衛

は川崎正蔵三回忌に刊行された『長春閣鑑賞』（図7、國華社、大正三年）の作品撰述を村山龍平、上野理一とともに、川崎芳太郎から託された川崎正蔵の畏友で、昵懇の古美術商であった。昭和三年（一九二八）の第一回神戸川崎男爵家売立、同六年の第二回売立（某大家所蔵品入札。藤田家と合同）、同十一年の第三回売立には二代山中吉郎兵衛が札元として名を連ねていることも、その縁によるところが大きいと推察される。川崎正蔵は明治十年に大阪江戸堀に邸を購入しており、山中吉郎兵衛との交流と作品収集もあるいはこの頃に本格化した可能性がある<sup>(10)</sup>。また、高橋箒庵『近世道具移動史』では、明治十年前後に道具買入を始めた一人として川崎正蔵の名を挙げていることから<sup>(11)</sup>、やはり川崎の作品収集は明治初期となり、山中吉郎兵衛が古美術商として支えたと考えてよからう<sup>(12)</sup>。

また、川崎は起立工商会社社長を務めた松尾儀助とも親しく交わったことが指摘されている<sup>(13)</sup>。起立工商会社はウィーン万博を経て、同時代の工芸品の積極的な輸出のために明治七年十一月に立ち上げられたのだが、旧家や古社寺から古美術品を買い入れ、積極的に外国人コレクターに売却していた。一方で、海外流出を憂える声が強くなり、明治十二年三月十五日に佐野常民を会頭とする龍池会が結成され、松尾もそのメンバーとして古美術品の輸出と保存のバランスをはかる活動を継続していった。東京商法会議所の同期であるな

どして松尾と交遊を持つなかで、川崎は古美術品の海外流出に強い懸念と危機感を抱いたと考えられる。松尾ら起立工商会社が買入れた古美術品の流出を防ぐために作品を購入することで、結果として川崎の収集が展開していった可能性は大いに考えられよう。このようにして、川崎正蔵は一大コレクションを形成し、美術館建設へ進んでいった。

#### （四）九鬼隆一による美術取調

川崎が開館式で「国の宝も埋没するに似たり」と述べた背景には、旧大名家をはじめとする華族や社寺伝来の優品が一般には公開されないことや、同じ実業界で財をなした数寄者たちが私的な場でのみ所蔵品を使い、見せることへの憂慮がうかがえる。所蔵品を公開することで国家に貢献することを目的に川崎美術館を開館したわけであるが、開館に際して九鬼隆一（一八五二〜一九三一）は以下の祝辞を寄せた。

九鬼氏の祝詞 右の川崎美術館の開場につき、九鬼隆一氏より泰西には一私人にて美術館等を建設せる者往々あれども、我国にて私立の美術館を設けたるは川崎美術館を以て嚆矢とす云々との祝文を送られたる由なるが、我々も此の如き盛挙者の漸次

輩出せん事を希望す。

〔大阪朝日新聞〕明治二十三年九月九日

九鬼成海氏の贈文 宮中顧問官九鬼隆一（号成海）氏は神戸市布引なる川崎正蔵氏の美術館新築成り、その開館式を行ふ際案内を受けしも、障る事ありて臨席せざりしかば、当時左の如き短文を認め贈りし由にて、字体は楷書にて筆力遒勁なりしと。神戸布瀑之畔。高爽潔清山水双美中。有友人川崎君之居。君特不厭勞費。私構美術館。面陳嘗所精蒐庶品欲以供同志縱覽。歴史美術知識學術。凡所以増国光辺国福者概資益於茲。盖在海外雖間有能為之者。若本邦則実係創建矣。顧他時必將有饗慕而倣之者。余焉得不称赞愉揚之哉。

明治二十三年九月一日

九鬼成海識

〔読売新聞〕明治二十三年十月十四日

九鬼は文部省、宮内省で博覧会や文化財行政に長く携わり、明治二十二年には東京・京都・奈良の帝国博物館総長に就任した。九鬼の祝辞は、川崎美術館が日本初の私立美術館であるという重要な証言となる。<sup>(二四)</sup>

明治二十一年九月二十七日に宮内省に発足した臨時全国宝物取調

川崎美術館研究（二） ―川崎正蔵の作品収集と美術館活動―

局で九鬼は委員長を務めたが、同局発足前となる明治二十年四月から近畿地方の宝物調査に赴いている。<sup>(二五)</sup> 明治二十一年七月十日から十二日まで、九鬼は大阪府下で建野郷三大阪府知事、藤田傳三郎、兵庫県下で川崎正蔵の所蔵品を岡倉覚三東京美術学校幹事、今泉雄作文部属等と審査した。神戸布引の川崎邸では十一日午後から調査を開始、新聞記事によると川崎は調査作品として長持三個分の美術品を用意していた。十一日夜には川崎邸で饗応を受け、海岸通の常盤舎に宿泊し、十二日も川崎正蔵の所蔵品調査が行われた。そして、九鬼一行は十三日の神戸発一番の汽車で大阪へ移動している。<sup>(二六)</sup> この美術取調を報告する官報には建野、藤田、川崎三名の所蔵品について、点検した所蔵品約五百五十点のうち、検閲が済んだ約百五十点を列記している。<sup>(二七)</sup>

藤田川崎二名ハ多年美術品ノ蒐集又ハ保存ニ関シ頗ル注意シタルヲ以テ、其優等ノ物品殊ニ多ク、為ニ尚ホ数日ノ検閲ヲ経ルニ非サレハ、固ヨリ能ク之ヲ終了スヘカラス。仍テ取敢ヘス其検閲済ト為リタルモノヲ掲ク。即チ其点検総数ハ大約五百五十点ニシテ、内先ツ優等トミトメタルモノハ六十点又之ニ次クヘキモノハ九十点ナリ。今之ヲ類別スレハ、先ツ優等ト認メタルモノ、内、絵画ハ四十五点、美術工芸品ハ十三点、又之ニ次ク

へキモノ、内、絵画ハ六十八点、彫刻品ハ二点、美術工芸品ハ二十点ナリ（去ル十七日京都府発本局出張員報告）

※本文中の作品名は表1にまとめたため省略した。

藤田、川崎の二人は長年きわめて意欲的に美術品を収集、保存してきたため、優等と評価できる作品がとて多く、全作品の検閲を完了するにはいまだ数日を要することが判明する。また、この調査に随行した新聞記者の報告でも同様の内容を伝える。<sup>(二九)</sup>

美術調査随行者特報 九鬼図書頭は岡倉美術学校幹事、今泉文部属等を随へ、去十日より十二日に至る三日間、大坂府の建野郷三君及び藤田傳三郎氏、兵庫県の川崎正蔵氏の愛蔵品を閲覧ありしが、就中藤田、川崎両氏は予て美術品を好尚するより多年に購入したるもの頗る多く、之を審査あらんには尚数日を要するに非ざれば結了するに至らず。今其一斑を閲覧して、先づ優等のものと認定ありし品類のみを聞くに（引用者註…列举作品は表1にまとめたため中略）尚此他に藤田、川崎両氏の分にて優等品に次ぐべきもの数多あれど之を略す。

表1にまとめた五十六点は、この美術取調時点で川崎が所蔵して

いた作品である。伝顔輝筆「寒山拾得図」や伝夏珪筆「風雨山水図」（重要文化財、根津美術館蔵）などの中国絵画、藝愛筆「花鳥図」十二点（京都国立博物館、ミネアポリス美術館、個人蔵ほか）や伝祥啓筆「鳥窠禪師・黄龍禪師図」（個人蔵）などの中世絵画、探幽・応挙といった近世絵画、彫刻、工芸品など、川崎は時代、地域、分野に捉われず、幅広く収集していたことを示す。五十六点の大半が『長春閣鑑賞』または売立目録から作品を特定可能で、現存の有無を問わず、図版から作品の詳細を知ることができる。『長春閣鑑賞』掲載作品が多いことは、美術館開館以前に川崎コレクションを代表する作品の多くが収集されていたことを示しており、きわめて重要な資料となる。

明治二十一年七月十一日・十二日の審査の折、川崎と九鬼、そして岡倉、今泉が作品を前にして、長時間さまざまな語らいをしたことは想像に難くない。川崎の一大コレクションを実見した九鬼から、私立美術館の設立について示唆や助言を得た可能性は大いに考えられる。この美術調査を踏まえて、川崎が翌年夏から川崎美術館の建設に取り掛かり、同二十三年九月六日に開館を迎えたならば、帝国博物館総長・宮中顧問官の要職に就く九鬼が開館式に招待されたこと、欠席に際して「日本初の私立美術館」と祝辞で賛嘆したことも首肯されるのではなかろうか。<sup>(二九)</sup>

### 三、川崎美術館の展観

川崎美術館の展観については、前稿で同時代の新聞・雑誌記事をもとに確認したが、ここに改めてその概略を整理するとともに、前稿以降に判明した事項についても紹介する（表2）。

#### （一）開館方法

川崎美術館は明治二十三年（一八九〇）九月の第一回展観から大正十三年（一九二四）十一月の第十四回展観まで活動した。同館は常時は公開されておらず、会期を定めて開館していた。第一回から第四回（明治二十六年）までは、毎年秋ないし夏を会期とし、第三回（明治二十五年）、第四回は会期中の第一・第三日曜日を開館、雨天の場合は次の日曜日に順延していた。開館日がきわめて限定されていたなかでも、第四回では初日（六月四日）に二百四十人ほど、二日目（六月十八日）には四百十四、五人が来館しており、期待と反響の大きさがうかがえる。

明治二十七年には展観が行われなかったが、これは川崎正蔵が前年十一月から大病を患ったことが一因である<sup>(三〇)</sup>。その後、明治二十八年から同三十年までは、第五回から第七回展観が毎年夏に行われた。第五回では毎週日曜日の開館となり、開館時間も午前九時から午後四時までと明記されている。第六回、第七回の開館日は変

則的であった。

明治三十一年も展観が行われていないが、川崎は同年二月十一日には「神戸新聞」を創刊し初代社主に就任したこと、前年末に再び大病を患っていたことも影響したと考えられる。翌三十二年には十一月九日に皇太子行啓にて布引の滝を御覧後、川崎邸を訪れ、新築の長春閣で御休憩された。これが長春閣の座敷開きとなり、行啓を経た十一月十二日には第八回が開幕している。『第八回陳列品目録』（兵庫県立図書館蔵）には、冒頭に川崎美術館、長春閣、玄関に陳列された宝玉七宝の紙焼写真が貼付されている。しかしながら、神戸でのペスト蔓延により、祭礼、供養、興行、集会等多衆の群集することを禁じた兵庫県令第六八号が十一月十八日夜に施行されたことを受けて、当初十一月二十六日までの会期であったが、十九日をもって閉幕した。感染症の流行と美術館の休館は、現代に限ったことではないことがわかる。

第九回から第十一回の会期は現在のところ不明である。『第九回陳列品目録』が島根大学附属図書館桑原文庫に所蔵されており、第九回は桑原羊二郎（一八六八～一九五五）の鴻池銀行神戸支店長在任中（明治三十四年十二月～明治四十年末）と想定される<sup>(三一)</sup>。なお、展覧会回次は不明ながら、明治三十六年には四月十三日の園遊会招待者へ美術館を公開後、同月十八日・十九日・二十五日・二十六日

に開館したことが判明する。<sup>(三三)</sup>

大正元年十二月二日、川崎正蔵は布引川崎邸でその生涯を閉じた。翌二年五月には第十二回展観が川崎正蔵の追福のために開催された。『第十二回陳列品目録』（公益財団法人 阪急文化財団 逸翁美術館（小林家文庫）蔵）が現存し、追福展観の詳細な新聞記事もあり、その様子をたどることができる。<sup>(三三)</sup> 大正七年十一月には第十三回展観が七回忌追福開館として行われた。『第十三回陳列品目録』（図8、個人蔵）が現存しており、こちらも川崎美術館へ入館する招待客の写真（図9）が載る新聞記事や國華での詳細な展観紹介が遺されている。<sup>(三四)</sup>

これまでの文献調査では、第十三回が確認できる最後の展観であった。その後の調査で、第十四回展観が大正十三年十一月二十二日・二十三日に川崎正蔵十三回忌に際して行われ、これが川崎美術館最後の展観と判明した。<sup>(三五)</sup>

## （二）観覧方法

現代の美術館では開館日、開館時間に訪れて、観覧料を負担すれば誰でも展示を観覧できる。それは戦前の美術館も同様で、たとえば同じく神戸に開館した池長美術館では第一回展観（昭和十五年（二九四〇）から第五回展観（同十九年）まで、毎年四月一日から五月三十一日の会

期で開館し、大人五十銭、小人三十銭を負担すれば観覧できた。

しかしながら、川崎美術館は誰でも観覧できたわけではなく、川崎美術館が発行した「縦覧券」が必要であった。すなわち、川崎からの招待客のみが観覧を許されており、「限定的な公開」といえる。<sup>(三六)</sup> 川崎家の邸宅内に建てられた美術館であるため、敷地内へ入るにはある程度の制限を設ける必要があったと考えられる。川崎から招かれた招待客は観覧料を負担することなく、川崎美術館を鑑賞し、その後は庭園に設けられた茶席や酒席を楽しんだ。開館時の記事を見ると、川崎美術館を鑑賞後は庭園に設けられた食堂で立食形式のレセプションも行われていた。京都、大阪より呼び寄せた美人十数名が川崎家の定紋がついた小袖を着て、お酌をしていたという。<sup>(三七)</sup> 現代の私たちが考える美術館とは異なり、紳士淑女の社交場でもあった。「限定的な公開」に関連して、開館当時は混乱があったことも伝えられている。各地の新聞に開館記事が掲載されたことにより、川崎美術館を博覧会や共進会のようにいつでも誰でも観覧できると誤解した人が日々、何人も川崎邸に案内もなく入り込み、「美術館はどこにあるのか」と尋ねる事態も発生したという。<sup>(三八)</sup>

幸いなことに、当館では第四回展観（明治二十六年）に際して、池長通に宛てた招待状（図10）と縦覧券（図11・12）を所蔵している。<sup>(三九)</sup> 池長通は神戸市会議長を務めた人物で、池長美術館を開館し、

当館の南蛮美術コレクションの礎を築いた池長孟の養父にあたる。封筒には表に「池永通殿」と宛名のみを記し、裏には「布引 川崎美術館」と発信元を記す。五月二十五日付の招待状には、六月四日から第四回展覧を開始すること、展覧をご覧いただきたいので通券（縦覧券）を同封したことを伝える。縦覧券は二枚現存し、その表には「縦覧券 神戸布引 川崎美術館」とあり、裏面には次のように注意書きがある。

此券は御一人に限り候。且此券御受取の人は必ず其御渡人の御認印、若くは御添書を要し候。此儀予め御承知置被下度候。

毎月第一第三日曜日に限り候。

但、当日雨天なれば次の日曜日に順延。

縦覧券一枚につき入館は一人に限ること、縦覧券の提供者の認印または添書が必要であると記す。つまり、縦覧券単体では入館できないことを意味し、提供者が認印を捺すか、添書を出すことで、来館者の身元の保証を求めている。ここでいう添書とは、先にみた招待状も含むと考えられる。さすれば、池長通は第四回展覧に招待されたが来館はしておらず、同封されていた縦覧券も当初から二枚であつたのだろう。このように、川崎美術館は、直接的ないし間接的

に川崎正蔵と関係する招待客のみが観覧を許されたことがわかる。

### （三）展示室と陳列品目録

川崎美術館と長春閣の展示室、展覧の観覧順路は、当時の新聞記事と陳列品目録からたどることができる。

招待客は川崎邸正門入口の受付で招待状と縦覧券を提示して、陳列品目録を受け取る。まずは川崎美術館を訪れて、陳列品目録によって室名の違いはあるものの、一階では①玄関（伊藤博文が揮毫した「川崎美術館」の扁額あり）↓②大書院（床之間あり）↓③上之間↓④広間↓⑤三之間↓⑥東入側↓⑦仏間↓⑧西入側↓⑨楼上登口を観覧する。階段で二階へ上がると、⑩楼上上段之間（床之間、違棚あり）↓⑪楼上広間と観覧した。美術館を出て、庭園に設けられた⑫煎茶席↓⑬抹茶席でもてなしを受けると、池に架けられた橋を渡り、長春閣へと進む。長春閣では⑭上之間、⑮次之間、⑯南天之間、⑰三之間（床あり）で展覧が行われていた。川崎家の名物であつた牡丹園の近くにはビアホールも設けられ、招待客を饗応した。<sup>（四〇）</sup>

川崎美術館の展示室については障壁画の一部が現存しており、室内の構成をうかがい知ることができる。川崎正蔵は南禅寺塔頭帰雲院の書院に伝来した円山応挙の障壁画をすべて購入し、その一部を川崎美術館の一階上之間、広間、三之間および二階楼上上段之間に

て使用した。現在、これらの障壁画等は東京国立博物館に所蔵されている。上之間は「江頭月夜図襖」四面(図13)と「月夜浮舟図襖」四面(図14)からなり、月明かりに照らされた夜の水景である。広間は「海辺老松図襖」十二面(図15)からなるコの字型の空間で、海辺の松樹の広がる空間を描き出す。三之間は「江岸楊柳図襖」八面(図16)および「江岸楊柳図壁貼付」三面(図17、現在は二曲屏風三隻)からなり、水辺を歩く高士と童子が描かれている。ただし、壁貼付の設置箇所は判然としない。この三室はいずれも山水図で、真体行体草体で描き分けられている。川崎美術館の図面は確認できないものの、襖の表裏の組み合わせや新聞記事から、美術館一階は禅宗寺院の方丈のごとき六室構成であった可能性があり(図18)、上之間、広間、三之間の三室の空間は再現可能である(図19〜21)。楼上上段之間には「雪景山水図襖」四面(図22)があり、「天明丁未暮春寫 応挙」の落款と「応挙」(朱文方印)の印章から、天明七年(一七八七)三月の作と判明する。すなわち、大乗寺客殿や金刀比羅宮表書院の障壁画などを手がけた、応挙全盛期の作となる<sup>(四二)</sup>。なお、帰雲院で「雪景山水図襖」と一連であったと考えられる壁貼付絵が現在は掛幅五幅として遺されている。特に大幅の「雪景山水図」一幅(図23)は第一回展観で大書院の床で展示され、のちに岡倉覚三が『日本美術史』にて称賛した作品と考えられる。

また、長春閣も図面は確認できておらず、建物内の構成は不明点が多い。『第九回陳列品目録』には上之間、次之間、南天之間、三之間の四室がある一方、『第十二回陳列品目録』『第十三回陳列品目録』には書院床之間、広間、南天之間の三室となっている。南天之間の室名は西山芳園筆「南天図小襖」二面、源琦筆「雪南天図襖」三面に由来する。

川崎美術館、長春閣の各室でどのような作品が展示されたかは陳列品目録からうかがえる。第一回以来、全十四回の展観で陳列品目録が製作、来館者に配布されたと考えられ、先述した第八回・第九回・第十二回・第十三回の四回分の目録が現存する。『第八回陳列品目録』の巻頭に、翌年のパリ万博へ出品する宝玉七宝の紙焼写真が貼付されているほかは、展示作品の図版は掲載されていない。本稿では各目録の詳細な検討までは至らないが、棒目録ではあるものの、美術館活動を物語る重要な資料である。各室に陳列された書画、器物の名称を列挙してその室礼を示すのは、「室町殿行幸御飾記」(徳川美術館蔵)のような会所室礼の記述に通じる趣向といえる。川崎美術館が文明から天文年間の擬古的建造物であり、伝顔輝筆「寒山拾得図」をはじめ東山御物を少なくとも七件収集したことなど、川崎の作品収集と美術館活動は足利將軍家による美術品収集と展観を意識していた様子が窺える。また、川崎は七宝工・梶佐太郎を尾張から

神戸に呼び寄せて宝玉七宝を製作させたほか、京都の陶工・九代帯山与兵衛も支援するなど、美術家のパトロンでもあった。美術家へのパトロネージという点でも足利將軍家に通ずる側面がうかがえる。

## むすびに

本稿では川崎正蔵による作品収集と川崎美術館の活動について概観してきた。日本に伝来する美術品を守り、同時代と後世に伝えることに川崎正蔵は熱意を注ぎ、日本初の私立美術館として川崎美術館を開館するにいたった。明治二十三年（一八九〇）というきわめて早い時期に個人で美術館を建設し、限定的ではありながらも招待客に公開したことは、同時代の美術愛好家、収集家に少なからぬ影響を与えたことだろう。川崎正蔵の熱意と収集、川崎美術館があったからこそ、神戸をはじめとする各地で美術館が生まれていった、そして美術史を彩る作品に私たちは出会えているというのは聊か過言であろうか。

川崎正蔵が収集した美術品は昭和二年（一九二七）の金融恐慌をきっかけとして、三度の売立が開催・企図されるなどして離れられなれとなっていた。<sup>(四三)</sup>川崎美術館や長春閣も昭和十三年の阪神大水害で被害を受け<sup>(四四)</sup>、同二十年の神戸大空襲で焼失したと伝えられる。今後は現存する陳列品目録の検討を進め、各室や各展観の

特徴を見出しながら、かねてより継続してきた現存作品の調査と『長春閣鑑賞』や陳列品目録、売立目録との対照を通して、川崎正蔵が築いたコレクションと今はなき川崎美術館に光を当て、その姿が展覧会としてよみがえるよう努めていきたい。<sup>(四五)</sup>

一 第一回内国勸業博覧会（明治十年）では上野寛永寺本坊跡に煉瓦造の「美術館」が設けられ、これが「美術館」と称した最初の建物である。第二回（同十四年）、第三回（同二十三年）においても上野公園、第四回（同二十八年）では京都市岡崎公園、第五回（同三十六年）では大阪市天王寺今宮に「美術館」が設けられた。東京国立博物館HP「東博について 館の歴史 6. 内国勸業博覧会 殖産興業と博物館」[https://www.tnm.jp/modules/r\\_free\\_page/index.php?id=149](https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=149)（二〇二一年九月十三日閲覧）、国立国会図書館HP「博覧会 近代技術の展示場」<https://www.ndl.go.jp/exposition/index.html>（二〇二一年九月十三日閲覧）

二 埜上衛「大阪府立大阪博物館の考察（一）―明治期公立博物館の活動―」『近畿大学短大論集』一一（二）号（一九七九）

三 大倉喜八郎は明治三十二年に大倉美術館の建設に着手し、同三十四年に落成、同三十五年一月より観覧に供し、同三十六年六月に開館式を行った。その後、大正四年に男爵の授爵を機に財団法人を設立し、同七年五月一日に大倉集古館が開館した。同館は財団法人として開館した日本初の私立美術館である。高橋裕次「大倉コレクションの概要」『明治150年記念 オークラコレクション』展図録（九州国立博物館、二〇一八）、村上勇「わが国初の私立美術館―浅野家・観古館について―」『広島県立美術館研究紀要』第九号（二〇〇六）

浅野家の観古館については、神内有理氏の論考が詳しい。神内有理「浅野家の私設美術館―「観古館」について―」『入城400年記念

広島浅野家の至宝 よみがえる大名文化』展図録（広島県立美術館、二〇一九）

四 山本実彦『川崎正蔵』（吉松定志、一九一八）、三島康雄『造船王川崎正蔵の生涯』（同文館出版、一九九三）、中野明『第3章 造船王川崎正蔵と神戸布引「川崎美術館」』『幻の五大美術館と明治の実業家たち』（祥伝社、二〇一五）、辻智美『松方幸次郎の周辺―川崎正蔵と川崎美術館』『松方コレクション展―松方幸次郎 夢の軌跡―』展図録（神戸市立博物館・神戸新聞社、二〇一六）

五 拙稿『川崎美術館研究（一）文献資料からたどる川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクション』『神戸市立博物館研究紀要』第三五号（二〇一九）

六 拙稿『川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクションに関する研究』『鹿島美術研究』年報第三七号別冊（公益財団法人鹿島美術財団、二〇二〇）、拙稿『川崎正蔵と池長孟―神戸ゆかりのコレクターと私立美術館』『北村清彦教授北大退職記念論集 アートと、そのあわいで』（中西出版、二〇二二）、『川崎正蔵と川崎美術館―第十三回展観からみた活動と顕彰―』（第七十四回美術史学会全国大会口頭発表、二〇二二年五月十四日）

七 川崎正蔵に関する事績については、三島康雄『造船王川崎正蔵の生涯』（同文館出版、一九九三）に拠った。

八 同書二〇〇～二〇一頁

九 『川崎美術館開会式の景況』（神戸又新日報明治二十三年九月九日）  
一〇 壽々木雪山『近世名匠伝（一三）日本建築家 柏木貨一郎』『建築工芸叢誌』第二期第一五冊（一九一六）

一一 先行研究では明治二十三年に長春閣が開館とするものや、川崎美術館と長春閣の二館が開館とするものがある。川崎美術館と長春閣を誤認して図版を掲載した文献も多いのみならず、近年刊行された『新修神戸市史』のように長春閣の写真を「川崎本邸」として掲載するものもある。小代薫『第四節 布引・諏訪山遊園等（遊園史）』『新修神戸市史 生活文化編』（神戸市、二〇二〇）

正しくは明治二十三年に布引川崎邸内に川崎美術館のみが開館し、明治三十二年十一月の皇太子行啓に際して長春閣が竣工すると、第九回展観（明治三十四年以降か）からは二館で展示が行われた。拙稿（註五前掲論文）にても明治二十三年に川崎美術館と長春閣が開館したと記したことをここにお詫びして訂正する次第である。

一二 昭和十三年七月三日から五日に発生した阪神大水害の被害状況を伝える記事で、かつて川崎邸がこのように評されたと記す。「裏山を再検討する① 山津浪はなぜ起った 花崗岩の崩壊期にある事を如実に物語る好適例」（『大阪毎日新聞』昭和十三年七月十七日）また、布引雌滝下流から南方の被災状況を撮影した写真には川崎美術館と建物が映る。「阪神大水害デジタルアーカイブ 阪神大水害から80年、個人の記憶を社会の記憶に」新生田川流域マップ 3「布引雌滝下流」<https://kobe-city.maps.arcgis.com/apps/MapTour/index.html?appid=e5fb499be0574e5194b1583277ba05df>（二〇二一年十二月二十三日閲覧）

現在の神戸駅周辺の被災状況を収めた動画にも川崎美術館と建物が確認できる。YouTube kobechannel「阪神大水害記録 宇治川く新神戸」<https://www.youtube.com/watch?v=F6YkSR0n2FE&list=PL279s>（二〇二二年十二月二十三日閲覧）

一三 「開館の詞」（『大阪毎日新聞』明治二十三年九月八日）、『川崎美術館開館式の景況』（『神戸又新日報』明治二十三年九月九日）

一四 三島、前掲書二六〇～七五頁

一五 「神戸川崎美術館」（『大阪朝日新聞』明治二十三年九月九日）

一六 「美術館の公開」（山本実彦『川崎正蔵』吉松定志、一九一八）

一七 「顔輝の寒山拾得」（山本実彦『川崎正蔵』吉松定志、一九一八）

一八 「百七十 顔輝の寒山拾得」（高橋箒庵『箒のあと 下』秋豊園、一九三三）

一九 「川崎正造翁のこと」（斎藤利助『書画骨董回顧五十年』四季社、一九五七）

二〇 朽木ゆり子氏は、山中吉郎兵衛を筆頭とする山中簪篁堂の人々

が川崎正蔵の家に頻繁に出入りしていたと述べる。朽木ゆり子『東洋の至宝を世界に売った美術商―ハウス・オブ・ヤマナカ―』（新潮文庫、二〇一一）九四頁

二一 「明治十年前後の買手」（高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂書店、一九二九）

二二 伝牧谿筆「客来一味」（現在、宮内庁三の丸尚蔵館に「蘿蔔蕪菁図」として所蔵される対幅のひとつ）は川崎正蔵の旧蔵品であるが、高橋篤庵は川崎が入手した時期を明治七、八年頃と記す。「客来一味の逸話」（高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂書店、一九二九）

この対幅は井上馨を経て皇室へ献上されたが、その経緯は太田彩氏の論考に詳述されている。太田彩「『館蔵品研究』伝牧谿筆「蘿蔔蕪菁図」の伝来を再考する」『三の丸尚蔵館年報・紀要』第九号（宮内庁三の丸尚蔵館、二〇〇四）

二三 三島、前掲書一〇八～一一一頁

二四 大正三年には九鬼も郷里の三田に大正記念三田博物館を設立した。

山口卓也「大正記念三田博物館と九鬼隆一」『なにわ大阪研究』第二号（関西大学なにわ大阪研究センター、二〇二〇）

二五 三輪紫都香「臨時全国宝物取調局の活動とその影響―博物館とその周辺の動向から―」『お茶の水史学』第六〇号（二〇一六）

二六 「九鬼図書頭」（大阪朝日新聞）明治二十一年七月十日・十一日・十二日・十三日・十四日、「神戸通信」（大阪朝日新聞）明治二十一年七月十二日・十三日・十四日、「九鬼図書頭」（神戸又新日報）明治二十一年七月十三日

二七 「美術取調ニ関スル報告摘要」『官報』明治二十一年七月二十三日

三島、前掲書二九一～二九三頁。久世夏奈子「『國華』にみる古渡の中国絵画 近代日本における「宋元画」と文人画評価の成立」『日本研究』第四十七号（二〇一三）

同時期に行われた藤田傳三郎の所蔵品調査は、近年展覧会で紹

介されている。中野慎之「藤田傳三郎と日本美術史」『名画の殿堂 藤田美術館展―傳三郎のまなざし―』展図録（奈良国立博物館、二〇二一）

「美術録写真」（明治二十二年十二月、宮内省書陵部図書寮文庫蔵）には第五帙に「山水ノ図」（雪村筆）、「山水ノ図」（正信筆）、第六帙に「鴨ノ図幅」（円山応挙筆）、第七帙に「雨中山水ノ図」（夏珪筆）「寒山ノ像」「拾徳ノ像」（伝日顔輝）が川崎正蔵の所蔵として掲載されている。宮内庁HP「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoyo/Detail/1000517770000>

（二〇二一年九月二十三日閲覧）

二八 「美術調査員随行者特報」（大阪朝日新聞）明治二十一年七月二十二日）

二九 開館式の挨拶で川崎が美術家の参考に供すると語ったのは、明治二十三年二月に九鬼が選抜委員長に任ぜられた帝室技芸員制度をふまえた発言の可能性がある。

三〇 三島、前掲書三七九頁

三一 桑原洋二郎・相見香雨研究会編『松江市ふるさと文庫21 郷土のエンサイクロペディア 桑原洋二郎』（松江市歴史まちづくり部史料編纂課、二〇一八）

三二 「川崎美術館の開放」（大阪毎日新聞）明治三十六年四月十五日）

三三 「川崎邸の美術館」（神戸新聞）大正二年五月三日）

三四 「川崎家の什宝展観」（神戸新聞）大正七年十一月一日、「珍什佳品を陳列して美術愛好家を迎へた布引川崎邸の美術館招待」（神戸新聞）大正七年十一月二日、「川崎美術館陳列」『國華』第三四二号（大正七年）

三五 「人事消息 ○本山彦一氏」（大阪毎日新聞）大正十三年十一月二十三日夕刊、川嶋禾舟「布引の懐古」『兵庫史談 布引号』（神戸史談会、一九四〇）、米村秀司「昭和金融恐慌と薩州財閥―川崎造船所・十五銀行 崩壊の軌跡」（ラグーナ出版、二〇二〇）

三六 観古館では観覧者は名刺を門衛に渡し、観覧券を申し受けるこ

とで、無料で入場が許された。招待制の川崎美術館よりは門戸が広げられているが、名刺を持つ立場というある程度の社会的保証がなければ入館できないことも示している。『観古館』（榎田直太郎、一九一六）

大倉集古館では観覧無料と明記し、観覧者は入門の際に在館票を受領し、出門の際にこれを返還するかたちをとっていた。在館票の詳細は不明だが、観古館よりもさらに門戸は広かったと考えられる。『観覧規則』『大倉集古館』（財団法人大倉集古館、一九三二）

三七 「川崎美術館」（大阪朝日新聞）明治二十三年九月九日、「川崎美術館開館式の景況」（神戸又新日報）明治二十三年九月九日）

三八 「美術館人絶えず」（神戸又新日報）明治二十三年九月十八日）

三九 招待状や封筒には「池永」とあるが、これは川崎美術館側の誤字である。

四〇 「川崎邸の美術館 山と積るゝ珍器什宝 富貴を誇る牡丹の花」（神戸新聞）大正二年五月三日、「川崎家の什宝展観 本日より向ふ三日間 古名画 古器物 千点を数ふ」（神戸新聞）大正七年十一月一日、「珍什佳品を陳列して美術愛好家を迎へた布引川崎邸の美術館招待」（神戸新聞）大正七年十一月二日）

第一回展観を伝える記事では、玄関→三之間→広間→上之間→大書院の順で詳述する。「神戸川崎美術館」（大阪朝日新聞）明治二十三年九月九日）

四一 「一七二 円山応挙筆 海辺老松図襖 四枚」『長春閣蔵品展観図録』（長春閣蔵品図録刊行会、一九三六）

四二 旧帰雲院障壁画については Jens Bartel 氏の詳細な研究があり、応挙の工房作と位置づけつつある。Jens Bartel, Style, Space and Meaning in the Large-Scale Landscape Paintings of Maruyama kyo (1733-1795), Submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy in the Graduate School of Arts and Sciences, COLUMBIA UNIVERSITY, 2019

四三 従来、神戸川崎男爵家の売立は昭和三年（『神戸川崎男爵家蔵

品入札目録）、同十一年（『長春閣蔵品展観図録』）の二度開催・企図され、同十一年の売立は二・二六事件により無期延期となったが、目録のみ同十三年に再刊されたことが確認されてきた。このほか、安永拓世氏のご教示により、昭和六年にも藤田家と合同で売立が行われたことが判明した（『某大家所蔵品入札』昭和六年十月二十九日、大阪美術倶楽部）。

四四 「復興の街を行く（5）不眠不休で復興へ 感慨奈何に治水の神様「加納翁」 布引生田川の方面」（大阪朝日新聞）昭和十三年七月十八日）は布引川崎邸周辺の被災状況を次のように伝える。

#### 水魔跳梁

流水につぶされた新生田川暗渠のマンホールとジャンプした水は川崎邸を襲い、折から川崎邸裏の山崩れに勢を得て一転、幾何学的正確さで布引町一丁目を総舐めにし生田町一丁目の一部を嚙んで再転。ここで水は三方に分れて、一は裏瀧道を下り、一は電車道を南下、さらに一は加納町二丁目を西南に走った、布引鉾泉、牡丹の園の川崎邸をはじめこのあたりといった住宅地は荒涼たる河原と化してその跡もなく土砂の堆積は二間におよんでいまこの上を歩けば市電のトロリー線が胸につかえ、復興に立上ったこの附近住民の物干竿の代用をつとめているのだから惨状推して知るべしだ。（後略）

四五 当館では開館四十周年記念特別展として「よみがえる川崎美術館―川崎正蔵が守り伝えた美への招待―」を本年十月十五日から十二月四日に開催予定である。

表1 明治21年美術取調における審査作品

※「美術取調ニ関スル報告摘要」(『官報』明治21年7月23日)に掲載された作品にかぎる。各種表記はこの摘要に基づく。

※「美術調査員随行者特報」(『大阪朝日新聞』明治21年7月22日)掲載作品には\*を付した。

■売立01.\*\*\*: 昭和3年『神戸川崎男爵家蔵品入札目録』、売立02.\*\*\*: 昭和6年『某大家所蔵品入札』、売立03.\*\*\*: 昭和11年『長春閣蔵品展覧図録』

■優等ト認タルモノ 絵画

番号	作者名	作品名	員数	材質技法	備考	『長春閣鑑賞』	売立目録	現在の所蔵者
1	顔輝筆	寒山拾得図	二幅対	絹本着色	「美術録写真」(明治22年12月、宮内省書院部図書寮文庫蔵)第7枚に「寒山ノ像」「拾得ノ像」(伝日顔輝)として、右記の作品が掲載	鑑賞04-01・02伝顔輝「寒山拾得図」	売立03-001顔輝「寒山拾得図」	東京国立博物館
2	応挙筆	滝山水図	一幅	紙本墨画				
3	応挙筆	鴨図	一幅	絹本着色	「美術録写真」(明治22年12月、宮内省書院部図書寮文庫蔵)第6枚に「鴨ノ図幅」(円山応挙筆)として、右記の作品が掲載	鑑賞03-041円山応挙「蕭秋水禽図」か		
4	応挙筆	巖上樓閣図	一幅	紙本墨画	第12回陳列品目録 川崎美術館階段壁上「応挙筆 雪景楼閣山水大幅」	鑑賞03-015円山応挙「雪景山水図」か		東京国立博物館
5	狩野正信筆	山水小景圖	一幅	絹本墨画	「美術録写真」(明治22年12月、宮内省書院部図書寮文庫蔵)第5枚に「山水ノ図」(正信筆)として、右記の作品が掲載	鑑賞02-036伝狩野元信「山水図」	売立03-087狩野元信「团扇山水」	
6		五髻文殊像	一幅	絹本着色		鑑賞01-009伝巨勢金岡「文殊菩薩図」	売立03-039巨勢金岡「五髻文殊菩薩図」	クリーブランド美術館
7	伝日張思恭筆	地藏王菩薩像	一幅	絹本着色		鑑賞04-020伝張思恭「地藏菩薩像」	売立03-049張思恭「地藏尊図」	
8	伝日慶思筆	住吉明神及巖図	一幅	絹本着色		鑑賞01-038伝吉慶思「住吉明神像」	売立03-038伝吉慶思「住吉明神神影」	個人蔵
9	狩野尚信筆	妙音天及水仙菊図	三幅対	絹本淡彩		鑑賞02-074狩野尚信「弁才天・水仙・菊図」		
10	夏瑾款アリ	山水風雨小景図	一幅	紙本墨画	「美術録写真」(明治22年12月、宮内省書院部図書寮文庫蔵)第7枚に「雨中山水ノ図」(夏瑾筆)として、右記の作品が掲載	鑑賞04-033夏瑾「風雨山水図」	売立03-002夏瑾「風雨山水図」	根津美術館
11	雪村筆	秋景楼閣山水図	一幅	紙本淡彩	「美術録写真」(明治22年12月、宮内省書院部図書寮文庫蔵)第5枚に「山水ノ図」(雪村筆)として、右記の作品が掲載	鑑賞02-023雪村「楊柳水閣山水」	売立03-063雪村「楊柳水閣山水」	個人蔵か
12	伝日顔輝筆	観音図	一幅	絹本墨画		鑑賞03-003伝顔輝「観音図」	売立01-012顔輝「楊柳観音図」	ネルソン・アトキンス美術館
13	応挙筆	猿子図	一幅	紙本墨画		鑑賞03-020円山応挙「猿図」	売立03-139円山応挙「猿図」	
14	応挙筆	夏冬山水図	二幅対	絹本着色				
15	応挙筆	四季富士図	四幅対	絹本着色			売立03-130「四季富士山水」	個人蔵
16	探幽筆	養老瀑布左右吉野龍田図	三幅対	絹本淡彩		鑑賞02-046~048狩野探幽「養老滝・芳野山・立田川図」	売立01-079狩野探幽「養老滝・吉野山・立田川図」	
17		金色来迎仏図	一幅	絹本着色		鑑賞01-015伝春日隆泰「聖来来迎図」	売立01-038隆泰「聖来来迎図」	
18	伝日元月山筆	楼閣山水図	二幅対	絹本着色		鑑賞04-028・029伝月山「楼閣山水図」	売立03-005月山「楼閣山水図」	

■優等ト認タルモノ 彫刻

番号	作者名	作品名	員数	材質技法	備考	『長春閣鑑賞』との対照	売立目録	現在の所蔵者
19		阿弥陀立像	一休	金銅				
20	伝日阿弥阿作	阿弥陀像	一休	木造		鑑賞05-011伝快慶作「阿弥陀三尊像」の阿弥陀か	売立01-334	広島・耕三寺

■優等ト認タルモノ 美術工芸品

番号	作者名	作品名	員数	材質技法	備考	『長春閣鑑賞』との対照	売立目録	現在の所蔵者
21		周代銅壺	一箇	銅造、青緑無取				
22		瑠璃玉嵌入金銅透彫太刀	一振	金具金銅、硝黒塗蛟、鞘唐木地螺鈿		鑑賞06-065「金装太刀」	売立01-344「古代金狂宝玉入太刀」	
23		唐子香合	一箇	漆器	第8回・第9回陳列品目録 川崎美術館1階東入側「黒地研出青貝唐子遊時絵香合」第13回陳列品目録 川崎美術館1階東入側「地黒研出唐子遊時絵香合」			
24		蓮手撰藤萩二羽衣袖硯箱	一箇	漆器		鑑賞05-045「嵐山時絵硯箱」	売立01-305「時代梨子地嵐山時絵硯箱」	
25		清水是随作 四睡図硯箱	一箇	漆器		鑑賞05-044伝清水九兵衛作「四睡図時絵硯箱」	売立03-276清水九兵衛作「四睡時絵硯箱 見返蛸蛤時絵」	
26		瓢箪香爐	一箇	磁器	「大阪朝日新聞」では漆器と記載			
27		和歌浦料紙硯箱	二箇	時絵		鑑賞05-031「和歌浦時絵料紙文庫 梨子地」及び鑑賞05-032「和歌浦時絵硯箱 梨子地」	売立01-301「梨子地和歌浦時絵料紙文庫」	

■之ニ次クヘキモノ 絵画

番号	作者名	作品名	員数	材質技法	備考	『長春閣鑑賞』との対照	売立目録	現在の所蔵者
28	小栗宗円筆	花鳥図	十二枚	紙本淡彩	現存作品は絹本着色	鑑賞02-013~015小栗宗栗「花鳥寂魚図 十二幀」		京都国立博物館、ミネアポリス美術館、個人蔵
29	雪村筆	龍女供養図	一幅	紙本	鍛治橋狩野伝来	鑑賞02-024伝雪村「観音拝塔図」	売立01-057雪村「雲中拝塔観音図」	個人蔵
30	狩野元信筆	雪景山水図	一幅	紙本墨画		鑑賞02-034狩野元信「雪景山水図」	売立03-069狩野元信「雪景山水横図」	
31	狩野探幽筆	中日出松左右吉野龍田図	三幅対	絹本着色		鑑賞02-067狩野探幽「住吉松・芳野桜・龍田紅葉図」	売立03-092狩野探幽「中日出住吉松左右吉野桜龍田紅葉三幅対」	
32	探幽筆	中観音左右山水図	三幅対	絹本淡彩				
33	常信筆	日ニ波図	一幅	絹本淡彩		鑑賞02-078狩野常信「東海朝陽図」	売立01-083狩野常信「東海朝陽図」	
34	応挙筆	呂洞賓図	一幅	絹本着色		鑑賞03-036円山応挙「呂洞賓図」	売立03-129円山応挙「呂洞賓図」	
35	兵春筆	鴨図	一幅	紙本着色		鑑賞03-144兵春「水辺鴨図」	売立03-144兵春「水辺鴨図」	
36	松村景文筆	鶴二波図屏風	一双	金地着色		鑑賞03-050・051松村景文「海浜仙鶴図」	売立03-159松村景文「金地海浜仙鶴屏風」	
37	伝日梅筆	人物図	一幅	絹本着色		鑑賞04-005銭舜举「桓野王」か	売立03-006梅筆「桓野王」か	個人蔵
38	周文印アリ	山水図	二幅対	絹本墨画		鑑賞02-009伝周文「山水図」か	売立01-061周文「真山水図」か	
39	用田筆	栗鼠図	一幅	紙本墨画			売立01-027用田「松栗鼠」/売立03-030用田「松栗鼠」	
40	伝日紀綱筆	柳二馬図	一幅	紙本淡彩	『長春閣鑑賞』、第1回売立目録には絹本着色作品が掲載	鑑賞04-018紀綱「柳蔭駢馬図」	売立01-029紀綱「柳蔭駢馬図」	
41	伝日馬麿筆	楊柳牧童図	二幅	絹本墨画	『長春閣鑑賞』、第1回売立目録には1幅の作品が掲載	鑑賞04-023伝馬麿「柳堤晚帰図」か	売立01-009馬麿「柳堤牧童図」か	
42	啓書記筆	禪祖図	二幅	紙本淡彩		鑑賞02-001・002祥啓「鳥窠禪師・黃龍禪師図」	売立01-053祥啓「鳥窠禪師・黄龍禪師図」	個人蔵
43	伝日狩野雅楽助筆	二十四孝図屏風	一隻	紙本淡彩		鑑賞02-037伝狩野之信「二十四孝図屏風」		
44	探幽筆	中白衣観音左右牡丹図	三幅対	絹本淡彩		鑑賞02-066狩野探幽「観音・花鳥図」	売立03-095狩野探幽「中滝見観音左右牡丹鳥三幅対」	
45	探幽筆	美人睡起図	一幅	絹本着色			売立03-101狩野探幽「王昭君午睡之図」か	
46	久隅守景筆	中俣成左右長明兼好像	三幅対	絹本淡彩		鑑賞02-081久隅守景「藤原俣成・鴨長明・兼好法師図」	売立01-085久隅守景「藤原俣成・鴨長明・兼好法師図」	
47	常信筆	雪鷺図	一幅	絹本墨画		鑑賞02-080狩野常信「雪鷺図」	売立01-086狩野常信「白鷺図」	
48	応挙筆	小禽図	一幅	絹本着色	抱一繡修ノ款アリ			
49		梵天帝釈天等屏絵	四枚	木板着色		鑑賞01-011「梵天・帝釈天図屏」	売立01-338「梵天帝釈天屏絵」	
50	山楽筆	耕職図屏風	一双	紙本淡彩			売立03-168狩野山楽「養蚕図屏風」	

■之ニ次クヘキモノ 彫刻

番号	作者名	作品名	員数	材質技法	備考	『長春閣鑑賞』との対照	売立目録	現在の所蔵者
51	伝日運度作	文殊像	一休	木造	第8回・第9回・第12回・第13回陳列品目録 川崎美術館仏間「文殊菩薩木像 運度作 一休」	鑑賞05-009「文殊菩薩像」か	売立01-335「木彫文殊像」か	
52		勢至菩薩像	一休	木造				

■之ニ次クヘキモノ 美術工芸品

番号	作者名	作品名	員数	材質技法	備考	『長春閣鑑賞』との対照	売立目録	現在の所蔵者
53		黒塗千鳥二波ノ茶箱	一箇	総梨子地高時絵	第8回・第9回・第12回・第13回陳列品目録 「黒地研出波に千鳥時絵茶箱」			
54		箔絵箱	一箇	木造				
55		黒塗時絵高砂文台及二見浦硯箱	各一箇			鑑賞05-041「浦島時絵文台及二見浦硯箱 梨子地」か	売立03-287「二見浦時絵文台硯」か	
56		朱漆螺鈿椅子	一箇	木造				

表2 川崎美術館の展観

回数	会期	開館日・時間	備考
1	[開館式] 明治23年(1890)9月6日(土) [会期] 明治23年(1890) 9月7日(日)～8日(月)		[開館式] 招待客：100数十名～200余名～300名(記事により異なる)
2	明治24年(1891) 開幕日不明～10月4日(日)		
3	明治25年(1892) 9月18日(日)～11月6日(日)	第1・第3日曜日 雨天の場合は次の日曜日に順延	
4	明治26年(1893) 6月4日(日)～7月16日(日)	第1・第3日曜日 雨天の場合は次の日曜日に順延	[来館者数] 初日(6月4日)：240人程 2日目(6月18日)：414、5人
5	明治28年(1895) 5月5日(日)～6月9日(日)	毎週日曜日 午前9時～午後4時 雨天の場合は休館。最終日は雨天でも開館	
6	明治29年(1896) 大阪毎日：4月13日(月)～6月6日(土) 大阪朝日：4月13日(月)～6月7日(日)	午前9時～午後4時 雨天の場合は休館 大阪毎日：4月13日・14日・26日、 5月3日・17日、6月6日 大阪朝日：4月13日・14日・15日、 5月3日・17日、6月7日	大阪毎日新聞と大阪朝日新聞で開館日の記載に齟齬あり
7	明治30年(1897) 5月15日(土)～6月6日(日)	5月15日(土)・23日(日)・30日(日) 6月6日(日) 午前9時～午後4時 雨天の場合は休館	
行啓	明治32年(1899)11月9日		長春閣の座敷開き
8	[当初] 明治32年(1899) 11月12日(日)～11月26日(日) [変更後] 明治32年(1899) 11月12日(日)～11月19日(日)	[当初] 11月12日(日)・19日(日)・23日(木・祭)・26日(日) [変更後] 11月12日(日)・19日(日)	神戸のベスト蔓延により、祭礼、供養、興行、集会等多衆の群集することを禁じた兵庫県令第68号が11月18日夜に施行。第8回展観は19日をもって閉幕。
9	不明(明治34年～40年頃か)		展覧会回次は不明ながら、明治36年4月18日
10	不明		(土)・19日(日)・25日(土)・26日
11	不明		(日)に開館記録あり
12	大正2年(1913) 5月2日(金)～11日(日)	5月2日(金)～11日(日) 午前9時～午後4時	川崎正蔵追福展観
13	大正7年(1918) 11月1日(金)～3日(日・祝)	11月1日(金)～3日(日・祝)	川崎正蔵七回忌追福展観
14	大正13年(1924) 11月22日(土)～23日(日・祭)	11月22日(土)～23日(日・祭)	川崎正蔵十三回忌追福展観

※このほかにも川崎の知人や国内外の賓客を饗応する際に、美術館の案内をしていたが、本稿では割愛した。



図1 川崎美術館『長春閣鑑賞』第6集、画像提供：国立国会図書館

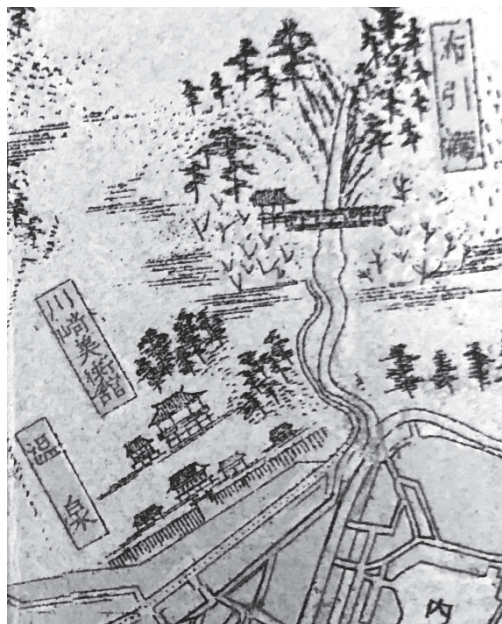


図3 「訂正増補神戸市図 附名勝旧跡」(部分)(明治33年、神戸市立博物館蔵(池長孟コレクション))



図2 「実地踏査 神戸市新図」(部分)(大正7年1月2日、神戸市立博物館蔵)



図4 長春閣(『長春閣鑑賞』第6集、画像提供：国立国会図書館)



図5 「神戸 布引 久形橋」(個人蔵)

この画像は紙上のみで公開しています

図6 重要文化財 伝顔輝筆「寒山拾得図」(東京国立博物館蔵)

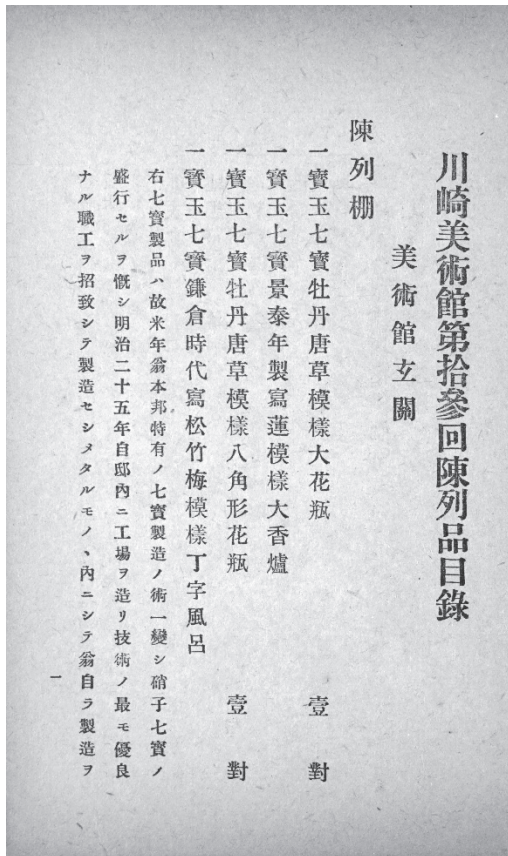


図8 『第13回陳列品目録』(部分)  
(大正7年、個人蔵)



図7 『長春閣鑑賞』第4集(部分)  
(大正3年刊、画像提供：国立国会図書館)

この画像は紙上のみで公開しています

図9  
「美術館縦覧(布引川崎邸にて)」  
(「珍什佳品を陳列して美術愛好家を迎へた布引川崎邸の美術館招待」「神戸新聞」大正7年11月2日)

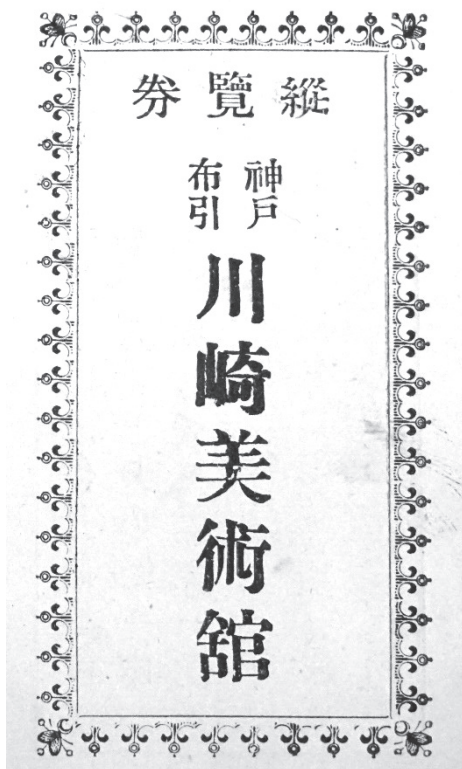


図 11 「川崎美術館第4回展覧 縦覧券(表)」  
(明治 26 年、神戸市立博物館蔵)

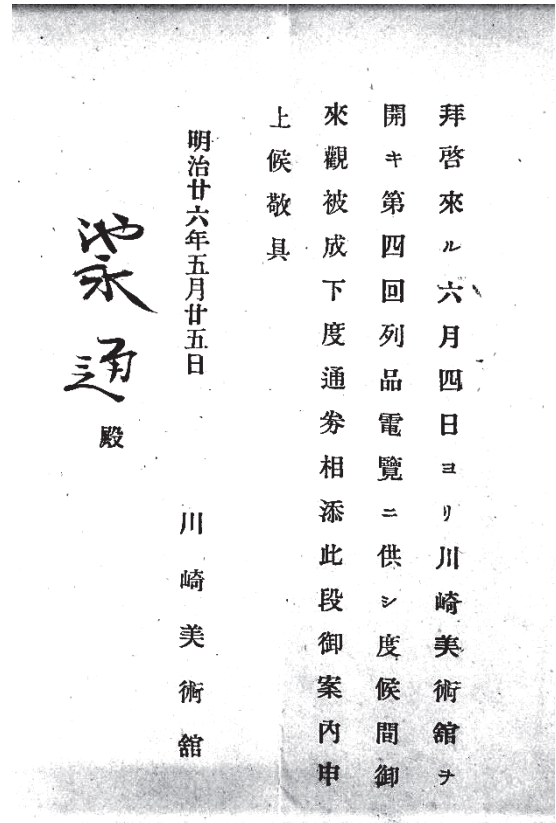


図 10 「川崎美術館第 4 回展覧 招待状(池長通宛)」(明治 26 年、神戸市立博物館蔵)

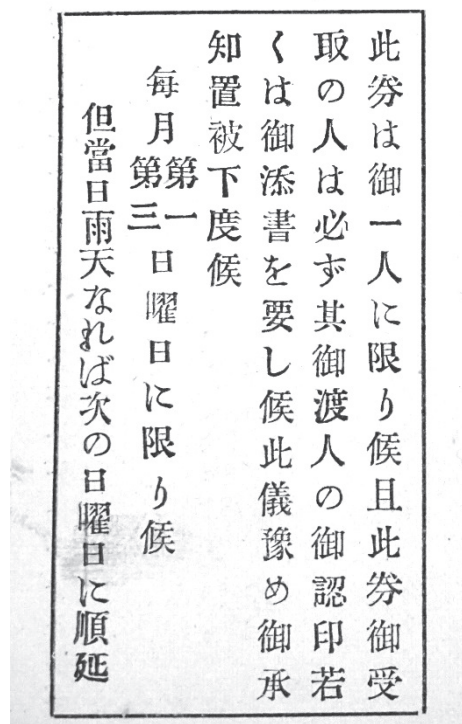


図 12  
「川崎美術館第 4 回展覧 縦覧券(裏)」  
(明治 26 年、神戸市立博物館蔵)

この画像は紙上のみで公開しています

図 13  
円山応挙筆「江頭月夜図襖」  
(天明7年、東京国立博物館蔵)

この画像は紙上のみで公開しています

図 14 円山応挙筆「月夜浮舟図襖」(天明7年、東京国立博物館蔵)

この画像は紙上のみで公開しています

図 15  
円山応挙筆  
「海辺老松図襖」  
(天明7年、東京国立  
博物館蔵)

この画像は紙上のみで公開しています

図 16  
円山応挙筆  
「江岸楊柳図襖」  
(天明 7 年、東京国立  
博物館蔵)

この画像は紙上のみで公開しています

図 17 円山応挙筆「江岸楊柳図屏風」(天明 7 年、東京国立博物館蔵)



図 18 川崎美術館 1 階 平面図(想定略図)

この画像は紙上のみで公開しています

図 19 川崎美術館 1階 上之間（再現）

東京国立博物館から提供の画像を加工

この画像は紙上のみで公開しています

図 20 川崎美術館 1階 広間（再現）

東京国立博物館から提供の画像を加工

この画像は紙上のみで公開しています

図 21 川崎美術館 1階 三之間（再現）

東京国立博物館から提供の画像を加工

この画像は紙上のみで公開しています

図 22 円山応挙筆「雪景山水図襖」(天明7年、東京国立博物館蔵)

この画像は紙上のみで公開しています

図 23 円山応挙筆「雪景山水図」(天明7年、東京国立博物館蔵)



図 24 阪神大水害直後の川崎美術館（阪神大水害デジタルアーカイブより転載）